

岩村田遺跡群

中宿遺跡

長野県佐久市岩村田遺跡群中宿遺跡発掘調査報告書

1998.3

医療法人三世会 金沢病院
佐久市教育委員会

中宿遺跡の調査について

今回調査を行った中宿遺跡からは、古墳時代後期の住居址、そして、中世～近世と思われる竪穴建物址（住居址よりやや小型の建物址）、更に、土坑（人為的に掘られた穴）などが発見されました。こうした住居址や建物址の年代は出土した土器や陶器・磁器などから解ります。この遺跡からは土器よりも17世紀～19世紀代の陶磁器がたくさん発見されました。そして、この陶磁器をよく分析してみると、16世紀末～17世紀初頭に作られた「織部の大皿、向付」の2点が含まれていました。この織部の陶器はたいへんに至高なもので、松本市の「松本城三の丸跡」から見つかった黒織部の茶碗以外はあまり県内では出土例がないようです。

さて、これらの出土遺物から本遺跡の当時の様子を探ると次のことが考えられます。中宿遺跡から東へ約100mの地点には大井城跡（黒岩城・王城・石並城）があり、この城は承久年間より約260年間大井氏が拠点とした場所で、その後近世まで佐久郡内の豪族が割拠した所でもあります。こうした背景から大井城跡に近接した本遺跡ゆえに16～19世紀代の陶磁器や土師質の土器が多く出土し、また、貴重な織部の陶器などが発見されたのでしょう。



1. 中宿遺跡グリッドⅠ-7付近出土
志野織部 向付



2. 中宿遺跡 特殊遺構出土
織部 大皿

例　　言

本書は、医療法人三世会金沢病院が行う病院拡張工事に伴う、佐久市大字岩村田字中宿に所在する中宿遺跡の発掘調査報告書である。

調査委託者 医療法人三世会 金沢病院

調査受託者 佐久市教育委員会

発掘調査所在地・遺跡名 佐久市大字岩村田字中宿808-1 「岩村田遺跡群中宿遺跡」

調査期間および面積 平成9年4月1日～4月24日 450.92m²

本書の編集・執筆は佐々木 宗昭が行った。

陶器・磁器の鑑定は市川 隆之氏のご助言を頂いた。

本書および出土遺物、記録類は全て佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　　例

遺構の略称 H 住居址 Ta 竪穴建物址 D 土坑 OT 墓坑 T 特殊遺構

G グリッド Z 表採

挿図の縮尺 住居址 1:80 竪穴建物址・土坑・墓坑 1:60

図版の縮尺 遺構写真は不統一。

土器・陶磁器・釘・砥石 1:4 石臼・他石製品類 1:6

一覧表の表示 一は計測不能 () は推定値 < > は現存値 単位はcm

土層の色調 『新版標準土色帖』の表示に基づく。

挿図中におけるスクリントーンは以下のものを示す。

〈遺構〉



地山

整地による碎石層

〈遺物〉



黑色地層

ススによる付着

写真図版中の遺物番号は、遺物実測図に対応する。

目　　次

例言

凡例

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1	第3節 土坑	13
第1節 調査の経緯と経過	1	第4節 墓坑	18
第2節 調査体制	1	第5節 特殊遺構	19
第3節 調査の概要	1	第6節 グリッド・表採遺物	26
第Ⅱ章 遺構と遺物	4	付編	27
第1節 竪穴住居址	4		
第2節 竪穴建物址	8		

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 調査の経緯と経過

中宿遺跡は、佐久市岩村田に所在し、佐久平特有の田切り地形上に細長く展開する岩村田遺跡群の南東部に位置しており、標高は約710mを測る。

平成9年度、金沢病院による病院拡張事業が本遺跡内で計画された。このため遺構が包蔵されている可能性があり同年1月に試掘調査を行った。その結果、遺構の存在が確認され遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、記録保存をする必要性が生じた。そこで、医療法人三世会金沢病院より佐久市教育委員会が委託を受け、同埋蔵文化財課が発掘調査を実施することになった。

第2節 調査体制

佐久市教育委員会

教育長 依田 英夫

教育次長 市川 源

埋蔵文化財課

課長 須江 仁胤 埋蔵文化財係 林 幸彦、三石 宗一、須藤 隆司

管理係長 棚沢 廉子 小林 真寿、羽毛田 卓也

埋蔵文化財係長 大塚 達夫 富沢 一明、上原 学

調査担当者 林 幸彦、佐々木 宗昭

調査員 阿部 和人、井出 徳四郎、金森 治代、小山 正吉、小山 澄江

桜井 牧子、佐々木 正、佐々木 久子、佐藤 志げ子、土屋 貞子

中島 武三郎、中嶋 照夫、新津 幸雄、増野 深志、渡辺 久美子

第3節 調査の概要

1) 調査地と遺構の検出

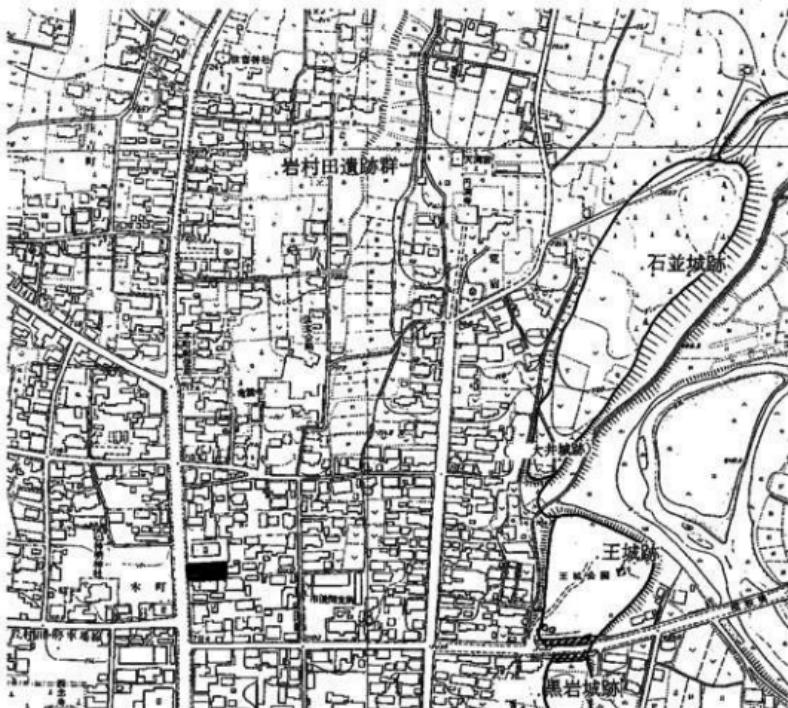
中宿遺跡は、岩村田遺跡群内に所在し、北から南へ緩く傾斜する岩村田の街内に位置する。当地点に近接する西側には大井城跡（石並城・王城・黒岩城）などの中世城跡が存在し、昭和59年には黒岩城跡の調査が行われた。また、中宿遺跡と大井城跡のほぼ中間地点には菅田遺跡があり昭和59・60・61・平成元年に調査が実施された。この1・2次調査からは、近接する大井城跡と

の関連を窺わせる沢状に窪んだ低地形、及び、中世と考えられる遺物の出土が見られた。

調査は、工事事業の対象区内においてまず、遺構の有無を確認すべく平成9年1月に試掘調査を行った。その結果、住居址の一部・土坑・ピット等が検出された。このため対象地の表土を重機によって除去し、同年4月に本調査を実施した。

検出された遺構は、住居址3棟（古墳時代後期2棟、時期不明1棟）、竪穴建物址7棟（中世～近世）、ピット群（時期不明）である。

以上の調査結果から古墳時代後期の住居址は近接する大井城跡からも確認されているが、本遺跡周辺においても展開されていた様子が明らかとなった。また、上記した遺構の多くは国産陶磁器などの年代傾向から推し、17～18世紀代に相当することが推察された。



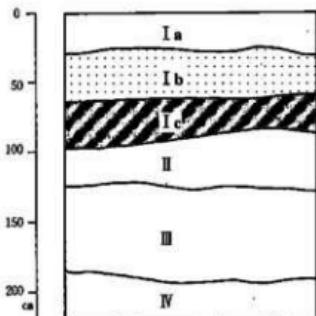
第1図 中宿遺跡の位置図と周辺遺跡の分布図

2) 層序

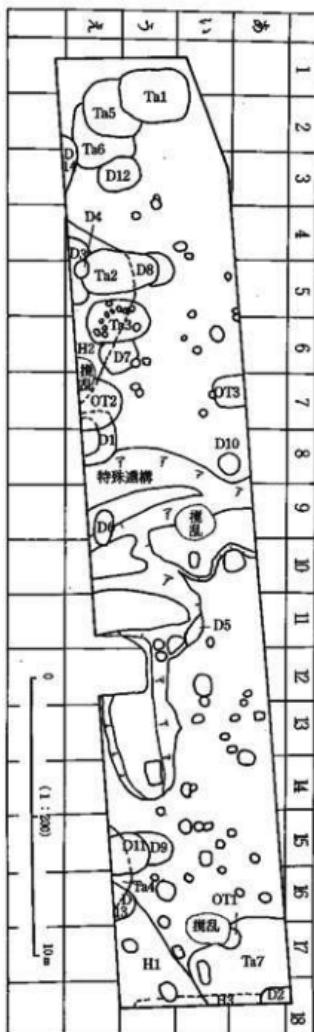
中宿遺跡は標高約710mを測り、現状地形は北側から南側へ緩く傾斜する。本遺跡の基本的な土層堆積状況を調査区の西端部西壁で観察した結果第2図に示した黒褐色土層（第Ⅱ層）がローム層の直上に堆積していることが認められた。

第Ⅰa～Ⅰc層は近・現代の瓦・陶磁器を多量に含む人為的な搅拌土、及び、碎石層である。第Ⅱ層は黒褐色土で低湿地や湖沼等に観られる堆積層と類似しており、本調査区においては、この第Ⅱ層上部が遺構検出面であることが確認された。第Ⅲ層は黄褐色のローム層で、浅間第1軽石流（浅間火山の堆積物）から形成される。第Ⅳ層はにぶい黄色橙色土で上位に堆積した第Ⅲ層のローム層中に地下水の浸透が影響し、灰黄色系の色調に変化したものと考えられる。

以上のように中宿遺跡の基本層序は4層に分割できるが、遺構検出面の第Ⅱ層の上部面は整地の際に埋め立てたと思われるⅠa～Ⅰc層によって破壊を受けていることが観察された。



第2図 基本層序模式図



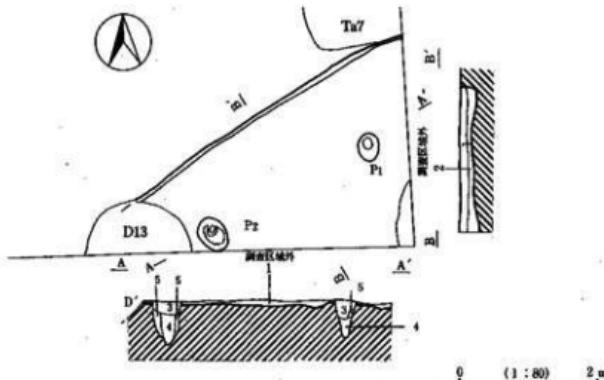
第3図 中宿遺跡遺構全体図

第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址（第4図～8図、図版一～二）

1) H1号住居址

本住居址は、調査区の東端部うー17・18グリッド内に位置し、全体層序第Ⅱ層上面において検出された。本址は整地によると思われる著しい削平を受けており、残存する遺構の深度はわずかであった。また残存する北壁プランの東側はTa7号竪穴建物址により壁面上部が破壊され、西側はD13号土坑の破壊を受けている。尚、東側・南側は調査区外となり、調査部分は北側の一部だけとなった。



- 1 褐褐色土 10YR3/2 ローム粒子・炭化物が微量混入。
- 2 明黄色土 10YR5/5 ローム粒子・ロームブロックが混入。
- 3 黑褐色土 10YR2/2 バクス・ロームブロックが混入。
- 4 棕褐色土 10YR3/2 ローム粒子・炭化物が微量混入。
- 5 黄色土 10YR4/4 ローム粒子多量混入。

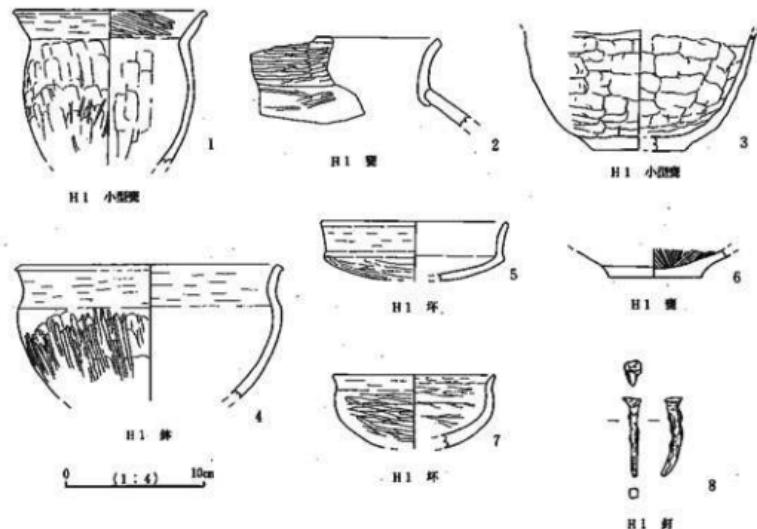
第4図 H1号住居址実測図

平面形態及び規模については、残存するプランが北壁部の一部分のみであるため不明である。しかし、本址の規模については北壁のプランが調査区外となる南東方向へさらに広がることが推されること、また、残存する北壁からはカマドが確認されず、調査区外に存在することが考えられ大型の規模を有する住居址であることが推察される。(出土土器の様相から古墳時代後期の住居址と思われ、佐久地方の当該期のカマドは北側に配されるのが一般的)

確認面からの壁高は、3~4cmと浅く著しく削平されていた。床面は2~8cmの厚さで貼り床が施され、全体に平坦で堅固である。ピットは2個確認され、P₁は約60×36cmの楕円形を呈し深度は68cmを測る。ピットセクションの状況・規模から本ピットは主柱穴と思われる。

出土した遺物で固化し得たものは8点ある。その内土器は7点あり、甌が4点(5-1・2・3・6)、鉢が1点(5-4)、壺が2点(5-5・7)ある。尚、壺の5-5は床面下より検出された。5-8の釘は混入遺物と思われる。

本址の所産期は、5-5・7の壺、及び5-4の鉢などの様相から古墳時代後期であろう。



第5図 H1号住居址出土土器実測図

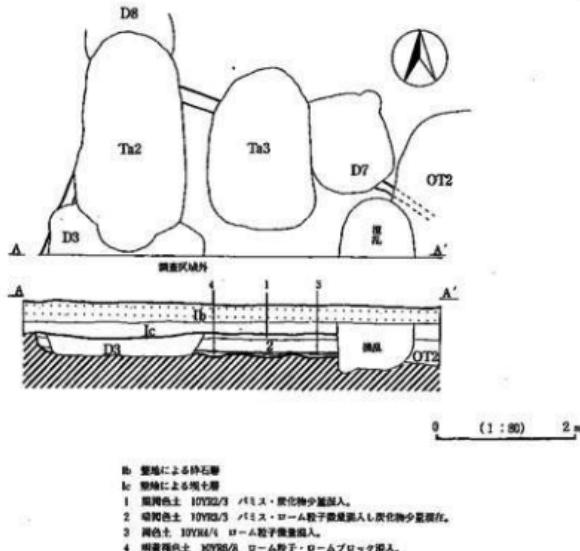
2) H 2号住居址

本住居址は、調査区の南西部えー5・6グリッド内に位置し、全体層序第II層上面において検出された。しかし、他遺構との重複が著しく、Ta2・3、D7、OT2の破壊を受け、北西部の床面、壁がわずかに残存しているのみである。(第6図)

平面形態及び規模は、住居址の約8割が調査区外に存在すると推され不明である。確認面からの壁高は、整地と思われる削平を受け約20cm前後と浅い。床面は約4cmの厚さで貼り床が施され全体に平坦で堅固である。残存する調査部分からは、ピット・カマドは確認されなかった。

出土した遺物で図化し得たものは、第7図に示した2点がある。7-1は小型甕で外面胴部は粗いヘラ削りによって整形された後ヘラナデによって調整されている。7-2は壺で外面胴部はヘラナデの後ヘラミガキによって調整され、口辺部は一部にヘラミガキが観察される。

本址の所産期は、7-2の土器様相から古墳時代後期であることが考えられる。



第6図 H 2号住居址実測図



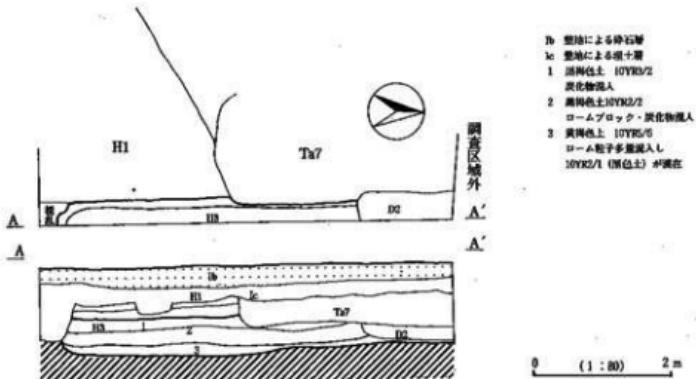
第7図 H2号住居址出土土器実測図

3) H3号住居址

本住居址は、調査区の東端あ・い-18グリッド内に位置し、全体層序第II層上面において検出された。他遺構との重複が著しく、H1・Ta7・D2の各遺構により破壊を受けている。本址の調査部分は西壁の立ち上り部のみで、9割以上は調査区外の東側に残存していることが確認された。残存する西壁の南西コーナーは撹乱による破壊を受け、北西コーナーはD2号土坑・Ta7号竪穴建物址によって破壊されている。

よって、平面形態及び規模は不明である。確認面からの壁高は、約26~36cmを測る。床面は4~12cmの厚さで貼り床が施され、全体に平坦で堅固である。

調査部分からの出土遺物がなく、本住居址の所産期は判然としない。が、本址は古墳時代後期と考えられるH1号住居址と重複関係にあり、破壊を受けている。このことから古墳時代後期とほぼ同時期か、若しくは、それ以前であろう。



第8図 H3号住居址実測図

第2節 竪穴建物址(第9図~13図、図版二~三)

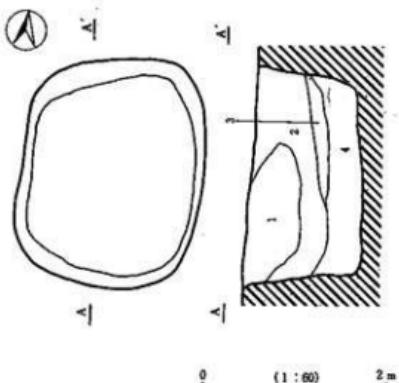
検出された竪穴建物址は7棟である。これらの覆土状態は大半がローム粒子を主体とする堆積状況を示し、人為的な埋土であることが認められる。

7棟の規模・形態をみると、南北方向に長軸を有し楕円形を呈するものが3棟、方形と考えられるものが3棟である。内1棟のTa 7号址は、南側に張り出し部を有している。他の1棟(Ta 4号址)は北側の一部分のみしか検出できず、形態は不明である。

楕円形を呈する3棟の規模(Ta 1・2・3)はいずれも長軸長2m内外、短軸長1m内外を測り比較的小規模であることが窺われる。また方形を呈するTa 5・6号址も一辺約2m内外と小規模である。張り出し部を有するTa 7号址は、検出された竪穴建物址の中では大型を呈することが推される。しかし、北側・東側の部分が調査区外となり計り得ない。なお、南側張り出し部の床面には約90×60cm、深さ約18cmの楕円形の凹部が認められ、入口施設の可能性が推される。

竪穴建物址から出土した遺物は、第13図に示した土師質土器小皿・内耳土器・北宋錢などがあり、他に図版十二に示した陶磁器がある。これらは人為的と理解される堆積状況の覆土中から出土しており、遺構と共に伴する遺物はほとんどないと思われる。従って、個々の遺構に対し明確な時期決定は困難である。だが、出土した国産陶磁器の時間的な位置付けを一応の目安と考え、本竪穴建物址を相対すると16世紀~18世紀代と推される。

第1号 竪穴建物址



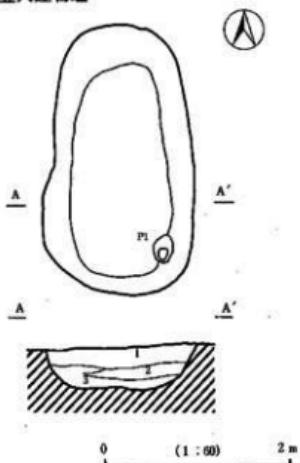
1 黄褐色土 10YR 6/6 ローム粒子・バシス・ロームブロック多量に混入。
2 黑褐色土 10YR 2/1 K1 多量混入。
3 黑褐色土 10YR 4/6 ローム多量混入。
4 黄褐色土 10YR 6/1 ローム粒子・バシス混入。

第1表 第1号竪穴建物址計測表

遺構番号	Ta 1	検出位置	う・1 グリッド
遺構関係	Ta 5	平面形状	楕円長方形
面積	3,152 m ²	長軸方向	N-6°W
壁長		壁高	
北側壁	160cm	106cm~112cm	
東側壁	206cm	113cm~131cm	
南側壁	162cm	122cm~128cm	
西側壁	184cm	117cm~134cm	
覆土の状態	4層 人為埋土	床面の状態	平坦
柱穴	—	出土遺物	土師質小皿 3点 土頭ツボ
備考		Ta 5 を破壊	
鉢図番号	9	鉢番号	二

第9図 第1号竪穴建物址実測図

第2号 穹穴建物址

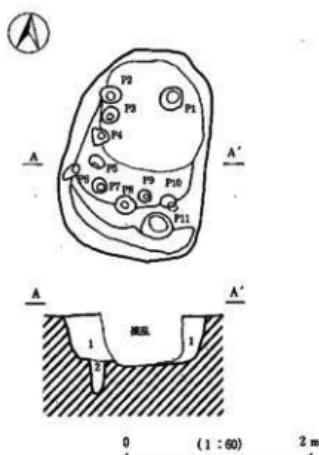


第2表 第2号穹穴建物址計測表

測定番号	Ta 2	検出位置	う・5グリッド
直徑関係	H 2・D 3・D 8	平面状態	椭円形
面 横	2,032 m ²	長軸方向	N-6.5' W
壁 長		壁 高	
北側壁	103cm		44cm~46.5cm
東側壁	252cm		37cm~51cm
南側壁	125cm		22cm~39cm
西側壁	234cm		41cm~48.5cm
覆 土 の 状 態	3層 人為的埋土	床 面 の 状 態	平坦で堅固
柱 穴	—	出土遺物	火鉢・調理用具 古鏡
備 考	H 2・D 3・D 8 を破壊する		
探査番号	10	図版番号	二

- 1 黒色土 10YR4/4 ハミス・ローム粒子混入。
2 濃褐色土 10YR2/3 ローム粒子・炭化物混入。
3 濃褐色土 10YR2/2 ロームブロック・炭化物混入。

第3号 穹穴建物址



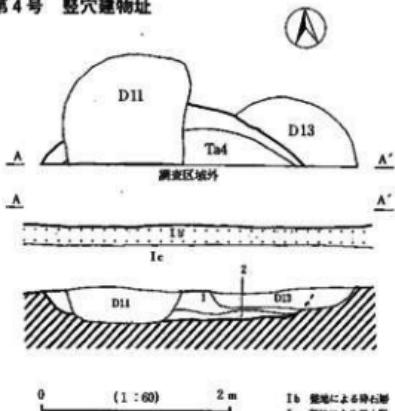
第3表 第3号穹穴建物址計測表

測定番号	Ta 3	検出位置	え・6グリッド
直徑関係	H 2・D 7	平面状態	椭円形
面 横	2,176 m ²	長軸方向	N-6' E
壁 長		壁 高	
北側壁	82cm		38cm~63cm
東側壁	191cm		45cm~51cm
南側壁	120cm		45cm~49cm
西側壁	200cm		48.5cm~58.5cm
覆 土 の 状 態	単 層	床 面 の 状 態	ほぼ平坦
柱 穴	ピット11個 配置	出土遺物	土師質土器・瓦石 火鉢・磨石
備 考	H 2・D 7 を破壊する		
探査番号	10	図版番号	二

- 1 黒褐色土 10YR2/3 ハミス・炭化物混入。
2 明褐色土 10YR2/6 ローム粒子多量混入。

第10図 第2・3号穹穴建物址実測図

第4号 穴穴建物址



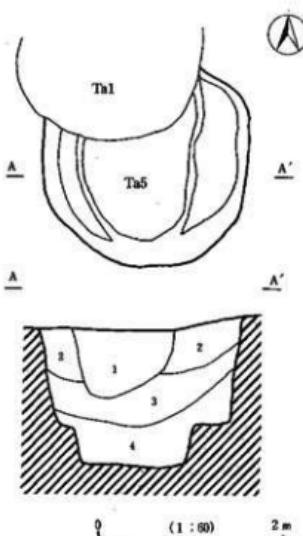
第4表 第4号穴穴建物址計測表

通構番号	Ta 4	検出位置	う・15グリッド
重複関係	D11・D13	平面状態	—
面 種	(0.336 m ²)	長軸方向	—
壁 長		壁 高	
北 側 壁	54cm	31cm~33cm	
東 側 壁	—	(33cm~37cm)	
南 側 壁	—	—	
西 側 壁	—	(28cm~34cm)	
覆 土 の 状 態	2層	床 面 の 状 態	ほぼ平坦
柱 穴	—	出土遺物	土師質小皿
備 考	D11・D13に破壊される		
探査番号	11	図版番号	

1 黒褐色土 10YR5/2 小石多量に混入・少量の炭化物、バミスを含む。

2 黑褐色土 10YR5/4 ローム粘子・バミス少量含む。

第5号 穴穴建物址



第5表 第5号穴穴建物址計測表

通構番号	Ta 5	検出位置	え・2グリッド
重複関係	Ta 1	平面状態	N~S~W
面 種	(2.112 m ²)	長軸方向	計測不能
壁 長		壁 高	
北 側 壁	—	—	
東 側 壁	168cm	144cm~156cm	
南 側 壁	129cm	142cm~156cm	
西 側 壁	計測不能	(133cm~140.5cm)	
覆 土 の 状 態	4層 人為的	床 面 の 状 態	底部段状
柱 穴	—	出土遺物	—
備 考	Ta 1 に破壊される		
探査番号	11	図版番号	三

1 黒褐色土 10YR5/5 バミス・ローム粘子多量混入し、炭化物混在。

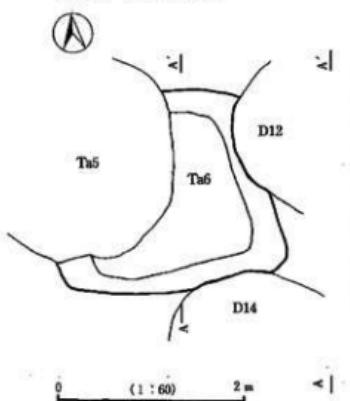
2 にが・褐色土 10YR4/2 バミス・小石・炭化物混入。

3 黒褐色土 10YR5/2 バミス・ローム粘子・人為。

4 黒褐色土 10YR5/3 ローム粘子・砂・小石混入。

第11図 第4・5号穴穴建物址実測図

第6号 穴建物址

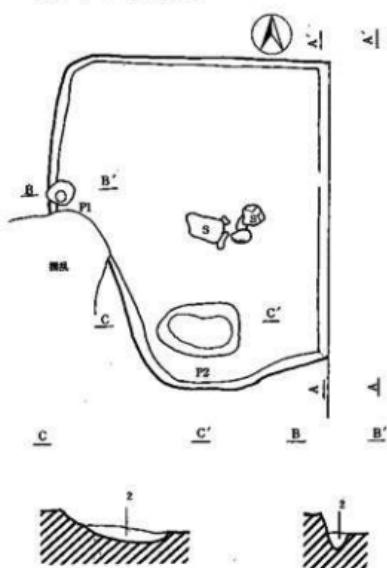


第6表 第6号穴建物址計測表

遺構番号	Ta6	検出位置	う・5グリッド
重複関係	Ta5・D12・D14	平面状態	南北方形
面積	<1,360 m ²	長軸方向	—
壁長	—	壁高	—
北側壁	<80cm	—	<88cm
東側壁	180cm	—	<84.5cm~99cm
南側壁	230cm	—	<72cm~97cm
西側壁	—	—	<85cm
覆土の状態	4層 人為的埋土	床面の状態	平坦
柱穴	—	出土遺物	—
備考	Ta5・D12・D14に破壊される		
測図番号	12	図版番号	三

1. 出海台上 10YK3/1 バイスク・ロームブロック投入。
 2. 深色土 10YR4/6 バイスク・ローム投入。
 3. 喀斯特土 10YR6/5 バイスク・ローム投入・ロームブロック投入。
 4. 深海土 10YK2/3 ロームブロック10YK2/1黒色土が当たる。

第7号 穴建物址



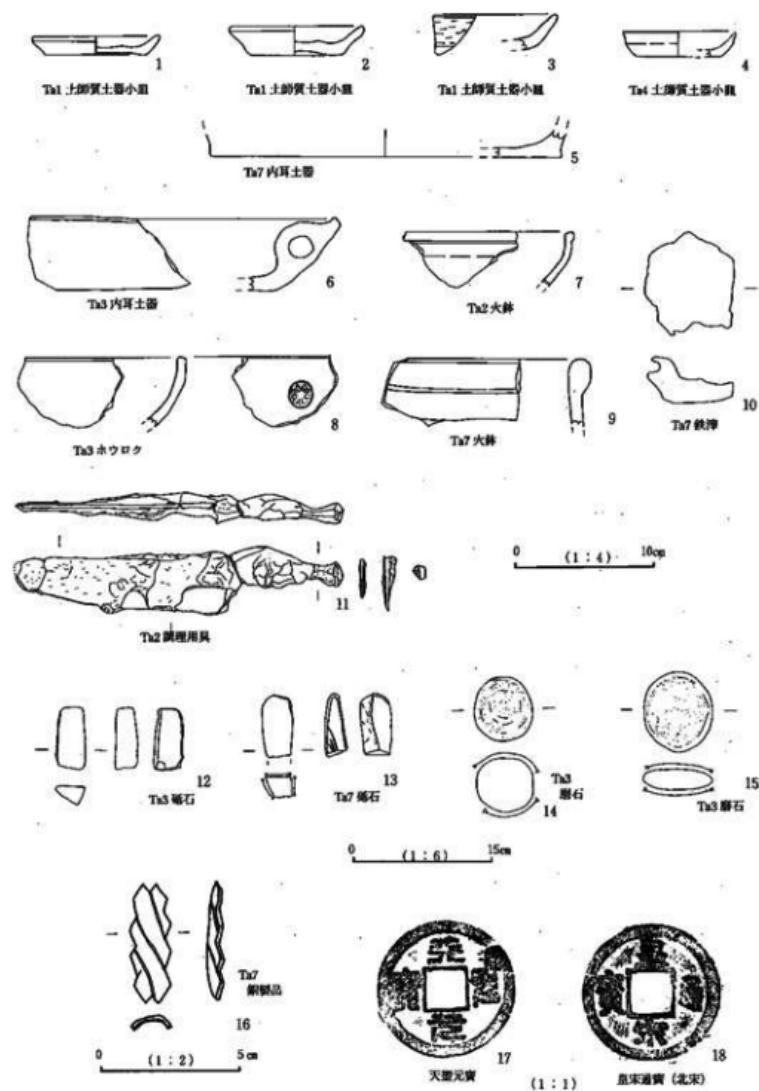
第7表 第7号穴建物址計測表

遺構番号	Ta7	検出位置	あ・17グリッド
重複関係	OT1・D2・H3	平面状態	北側が張り出る
面積	<7,000 m ²	長軸方向	計測不能
壁長	—	壁高	—
北側壁	—	—	—
東側壁	—	—	—
南側壁	<170cm	—	<21cm~25cm
西側壁	<360cm	—	<24cm~29cm
覆土の状態	單層	床面の状態	ほぼ平坦で堅固
柱穴	1コ	出土遺物	土鍋・古鏡・火鉢 瓦器・麻脱品・鉄サイ
備考	OT1・D2に破壊され、H3を破壊する。		
測図番号	12	図版番号	三

- 1b. 壁地による碎石層
 1c. 壁地による人為的埋土層

1. 喀斯特土 10YK3/3 腐化物・地上断片・バイスク混入。
 2. 出海土 10YK3/2 腐化物少量混入。

第12図 第6・7号穴建物址実測図



第13圖 竪穴建物址出土遺物実測図

第3節 土坑（第14図～20図、図版三～五）

中宿遺跡では、総数14基の土坑が検出された。時期的に大別すると次の通りである。

1) 中世以前 10基 D1号土坑～D10号土坑（第14図～第17図）

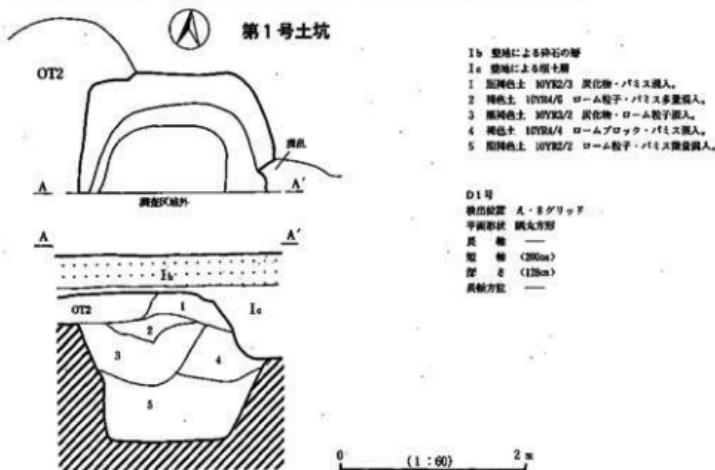
2) 中世～近世 4基 D11号土坑～D14号土坑（第18図～第19図）

これら14基の土坑の多くは、他遺構との重複関係がありその大半が破壊を受けている。また、残存するプランから推し検出された土坑の6割以上が、調査区域外に存在しているものと考えられ、第1号土坑以外のいずれも整地と思われる著しい削平のため残存する壁高も極めて少ないと窺われた。こうした状況から出土遺物も少なく各土坑の明確な時期決定は困難であった。

しかし、中世以前と思われる土坑の覆土は、概ねブライマリーな堆積で黒褐色土系の色調を示し、中世～近世の遺構はその大多数がロームブロック・ローム粒子を多く含む人為的な埋土であることが、出土遺物とともに観察された。

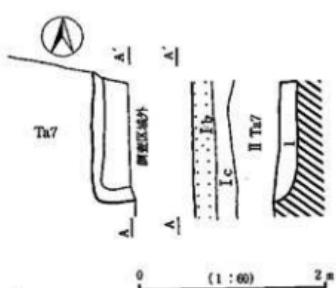
1) 中世以前の土坑（第14図～第17図、20図）

中世以前と思われる土坑は、第1号～10号の10基である。いずれも中世～近世と考えられる遺構の破壊を受けている。出土遺物は第1号土坑の坏（20-1）、第8号土坑の甕口縁部（20-2）、そして、第9号土坑の磨石（20-12）がある。尚、第1号土坑の坏は第14図セクションの5層（黒褐色土）中からの出土であり本遺構に伴う遺物と考えられる。



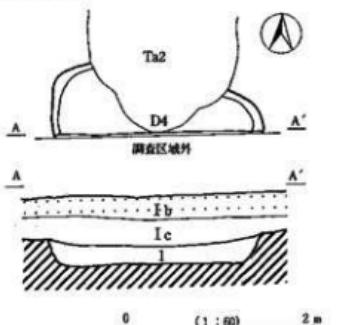
第14図 第1号土坑実測図

第2号土坑



I b	整地による跡の解	D 2 号
I c	整地による人為地帯化	高山畠 あ・38グリッフ
II	Tz 7号原土 原生灰化土 (10YR 4/3) 灰化度・ 燒土粒子・バミス泥炭	平面形状 長 軸 短 軸 深 底 (mm) 根莖類
I	原生灰土 10YR 2/2 小石・灰化物混入。	

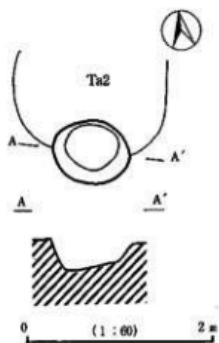
第3号土坑



Ib 整地による砂石層
 Ic 整地による人为的埋土層
 I 黒褐色土 10YR5/1 ローム粒子少量混入
 1.5%が砂質

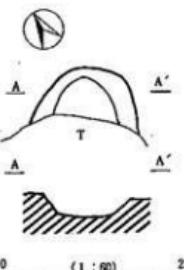
D3号
抽出位置 A・5グリップ
平面形状 楕丸方形
長 約 —
対 約 (220cm)
深 度 (24cm)
最終定位 —

第4号土坑



D 4 号	
検出位置	ル・ミグリット
平面形状	円形
半 径	80cm
周 長	72cm
深 度	(35cm)
北極方位	N-4°E

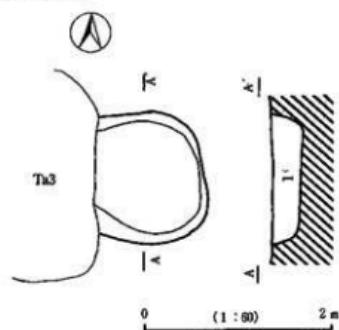
第5号土坑



D5号	11-11グリット
被出深度	(椎円形)
平面形状	—
長 縄	—
短 縄	112cm
深 度	(28cm)
長軸方位	—

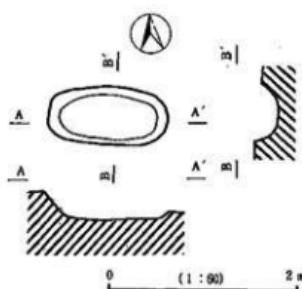
第15図 第2・3・4・5号土坑実測図

第7号土坑



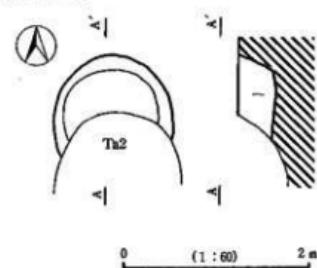
1. 土壌色土 10YR2/2
バニス・炭化物混入。
D7号
積出位置 う・5グリッド
平面形状 植円形
長 軸 440cm
短 軸 340cm
深 底 33cm
長軸方位 N-8°-W

第6号土坑



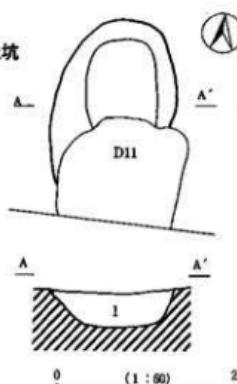
D6号
積出位置 え・9グリッド
平面形状 植円形
長 軸 125cm
短 軸 95cm
深 底 34cm
長軸方位 N-97°-W

第8号土坑



D8号
積出位置 う・5グリッド
平面形状 ローム形
長 軸 —
短 軸 (120cm)
深 底 (40cm)
長軸方位 —

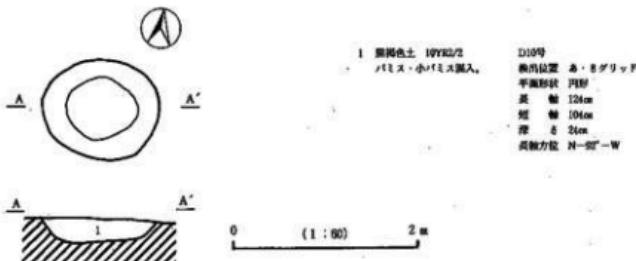
第9号土坑



1. 土壌色土 10YR2/3
バニス・ローム粒子・炭化物混入。
D9号
積出位置 う・15グリッド
平面形状 植円形
長 軸 —
短 軸 (120cm)
深 底 8 (40cm)
長軸方位 —

第16図 第6・7・8・9号土坑実測図

第10号土坑



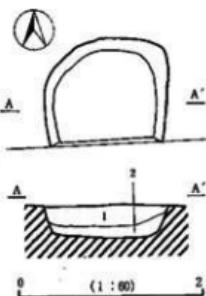
第17図 第10号土坑実測図

2) 中世～近世の土坑(第18図～第20図)

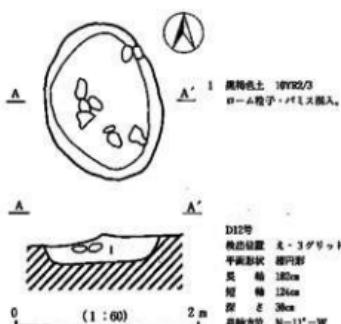
中世～近世と思われる土坑は4基が確認された(第18図～第20図)。これらの土坑の堆積状況は大多数が人為的な埋土であり、黄褐色のロームブロックが多量に覆土中に混在する。

出土した遺物は、灯明皿(D12・図版十二)、そして、第20図の火鉢(D14号)・羽釜(D14号)・碁石状石製品(D11・13号)・磨石(D11号)・釘(D11号)などがある。これらは各構造との共伴性を肯定できるものはほとんどなく明確な時期決定は困難である。しかし、出土した遺物の中で、国産陶器(灯明皿・火鉢)などは人為的埋土の形態を示す土坑と一括りが考えられる。従って、16世紀末～19世紀代の様相を呈する陶器の年代傾向から推し、本土坑が営まれた時期も大差ないものと思われる。

第11号土坑

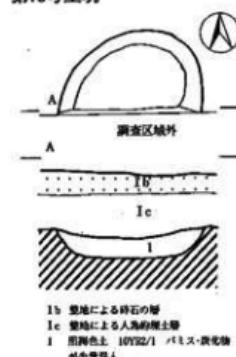


第12号土坑

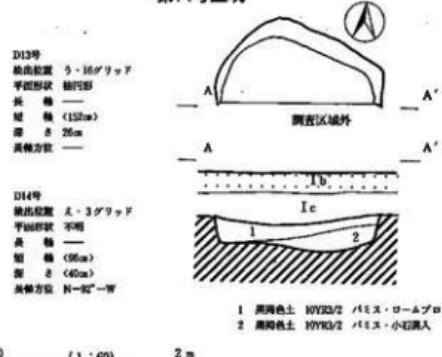


第18図 第11・12号土坑実測図

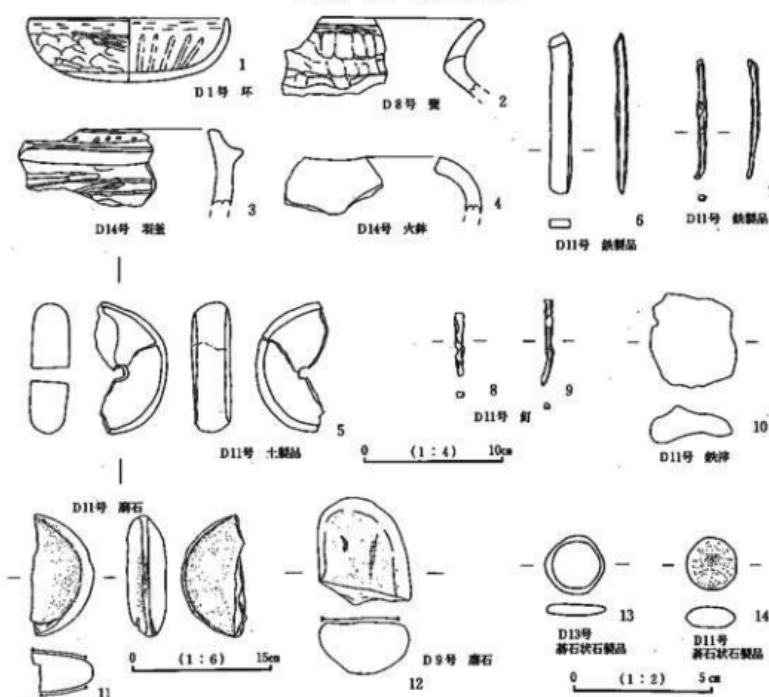
第13号土坑



第14号土坑



第19図 第13・14号土坑実測図



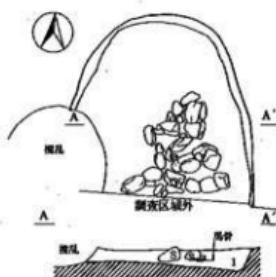
第20図 土坑出土遺物実測図

第4節 墓坑

本跡から3基の墓坑が検出された。これらの覆土堆積状況は一様にローム粒子・ロームブロックが多く量に混在した層をなし、中世～近世土坑で看取された人為的な埋土と同様な形態を示す。第1号墓坑（第21図）は、あー17グリッド内に位置する。遺構内から人頭大の石と共に骨粉（種別不明）が検出された。第2号墓坑（第21図）は、えー7グリッド内に位置する。遺存する深さは、著しい削平を受け20cm前後と浅い。遺構内からは第22図に示した五輪塔（火輪部）と共に人頭大の石が出土し、その直下から老齋馬で小型馬相当と思われる白磁9本・頭蓋骨・環椎片・軸椎片が検出された。他に22-3の古銭（元豐通寶）が覆土中より出土した。第3号墓坑（第21図）は、いー7グリッド内に位置する。遺存する深さは著しい削平を受け約20cm前後と浅い。遺構内からは、熟年～老年期と思われるヒトの脳頭蓋片が出土した。他には22-2の土製円板がある。

検出された3基の墓坑の明確な時期決定は困難であるが、上記した覆土堆積の状況から中世～近世と言えるのみである。

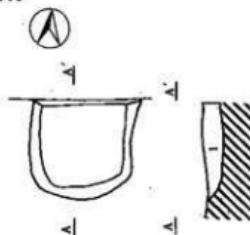
第2号 墓坑



1. 陶海色土 10TR3/2
バニス・ローム粒子混入
OT2号
地表面高 約-7
平面形状 植円形
長 傷 —
短 傷 60cm
深 底 24cm
長軸方位 —

0 (1:60) 2 m

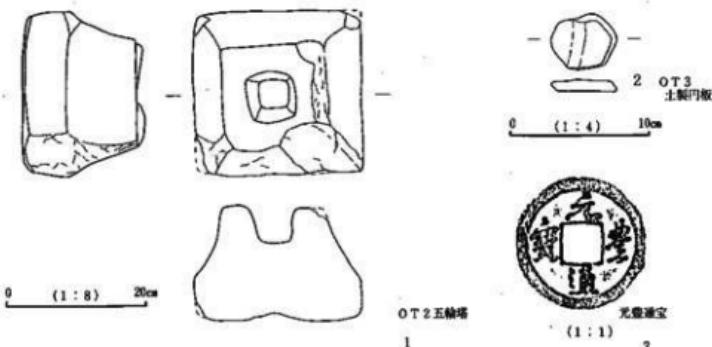
第3号 墓坑



OT3号
地表面高 約-7
平面形状 植円形
長 傷 —
短 傷 112cm
深 底 24cm
長軸方位 —

1. 陶海色土 10TR3/2
バニス・ローム粒子・炭化物混入

第21図 1・2・3号墓坑実測図



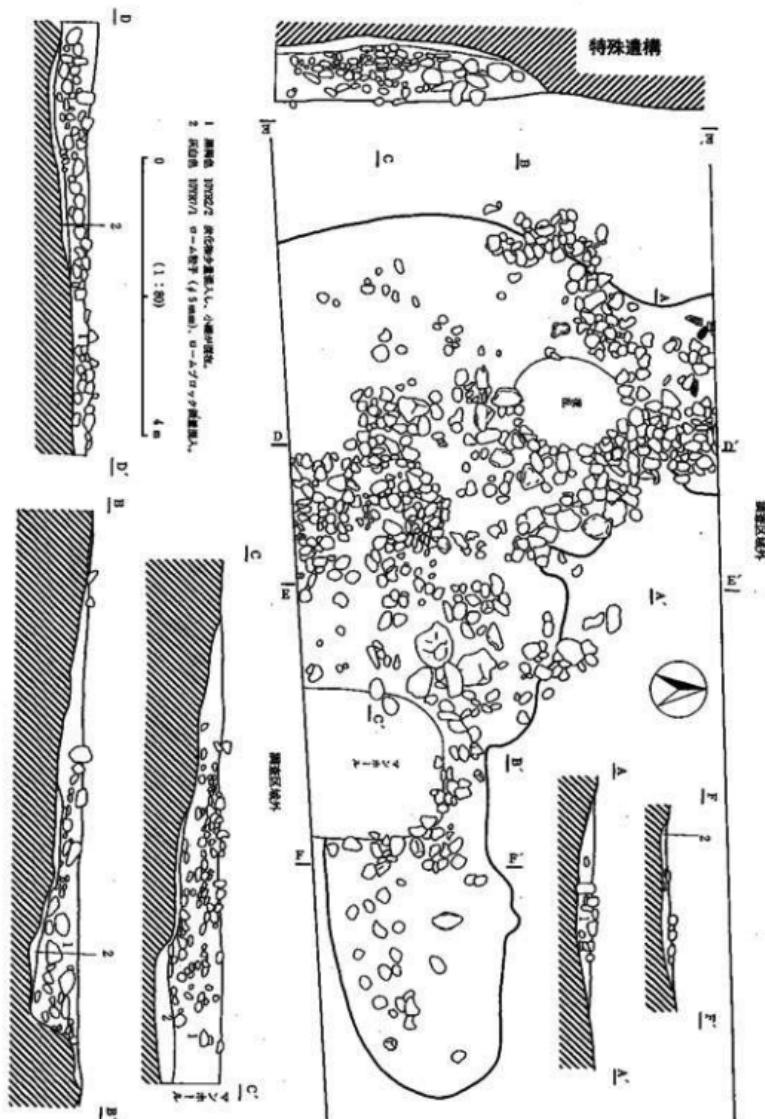
第22図 墓坑出土遺物実測図

第5節 特殊構造(第23図~30図、図版五~六)

本遺構は調査区のほぼ中央付近より検出された。平面形態は北側、南側が調査区域外となり旧状は不明である。しかし、東側に幅約3m、長さ7mの張り出しが認められる。また、残存するプランから推し、北側にも同様な張り出し部を有することが考えられる。深さはグリッドdee-11付近で最とも深く110cmを測る。張り出し部の深さは東・北側の張り出し共に20cm~30cmと浅く掘り窪められている。覆土の堆積状況は2層に分割され、第1層の黒褐色土中からは人頭大の石が多量に出土した(第23図・図版五一~7)。そして、その隙間からは第8表に示した土師質土器・陶磁器・歯骨・古銭・石製品などが検出された(第24図~第30図)。これらの遺物出土状況は第24図に示した様に遺構のほぼ全域から出土している。種別に観ると陶磁器・石臼類・古銭などが多く次いで馬、イノシシ、イヌなどの獸骨である。

本遺構の覆土は、他の中世以後の人为的埋土とは異なっており、出土した遺物の時期は第8表に示した中世~近世のものがある。しかし、その多くは近世の遺物である。

巻頭図版に示した混入遺物の織部一大皿・志野織部一向付(16世紀末~17世紀)の2点は、佐久郡内では初例で、県内でも希少なものである。この織部の陶器は松本城三の丸跡の調査で出土しており、主に城館跡からの出土例が多いようである。今回出土した2点の織部については次のことが推される。本遺跡に近接する東側約200mの地点には、承久年間より約260年佐久平に勢力をふるった大井宗家とその一族が挙った大井城跡がある。文明16年村上・武田氏の佐久侵攻後はしだいにその勢力は衰退する。しかし、その後にあってもこの種の陶器を保持し得た勢力の存在を考えざるを得ないような貴重な資料である。

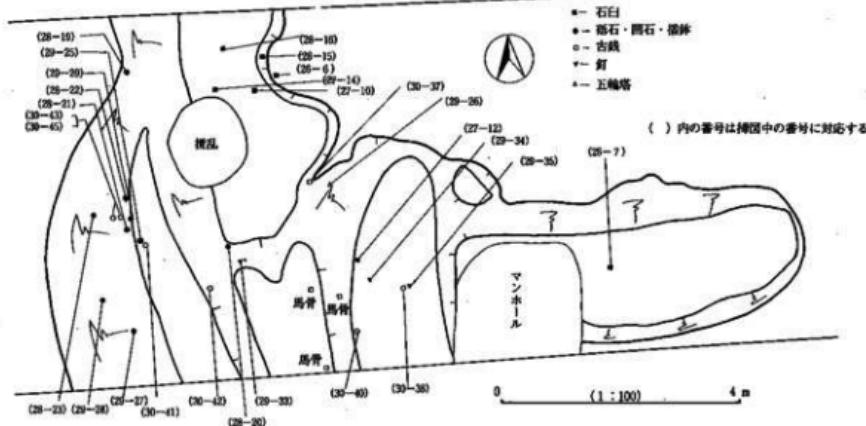


第23図 特殊構実測図

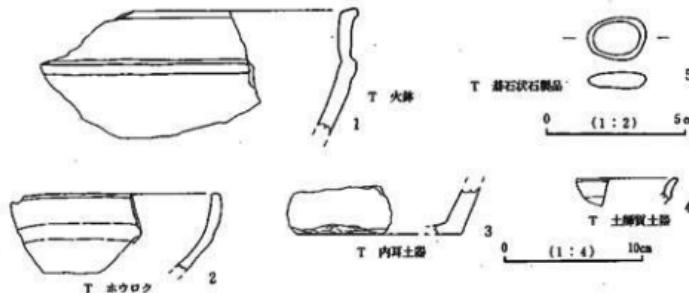
第8表 特殊遺構出土遺物一覧表

挿図番号	種別	器種	時代
第25図	土師質土器類	内耳土器、土師質土器小皿、火鉢他	主に19世紀代
卷頭・図版十二	陶磁器類	織部一大皿、志野織部一向付、他陶器	16c後半、19世紀
第30図	古銭	北宋銭、寛永通宝、外8点	中世～近世
第26～29図	石製品類	石臼・茶臼・回石類(第26～28図)、五輪塔他(第29図)	中世～近世
第29図	鉄製品	釘 鉄滓 他	不明
獸骨〈馬〉肩甲骨一解体痕と思われる切り傷あり。桡骨一右桡骨で大きさから小型在来馬か。 中手骨一ネズミ類による咬み痕あり。他に尺骨などが出土 (イノシシ) 左上腕骨一イヌと思われる咬み痕多数あり。(イヌ) 右太腿骨の大きさから大型犬			

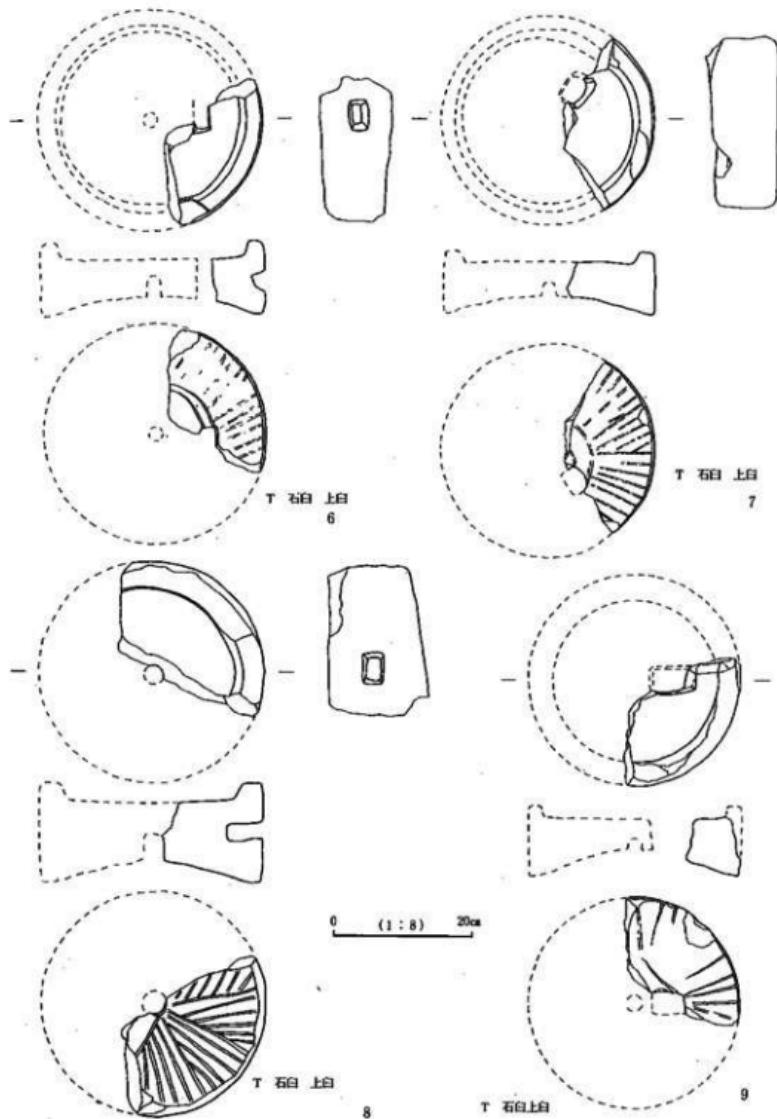
特殊遺構(掘り方)



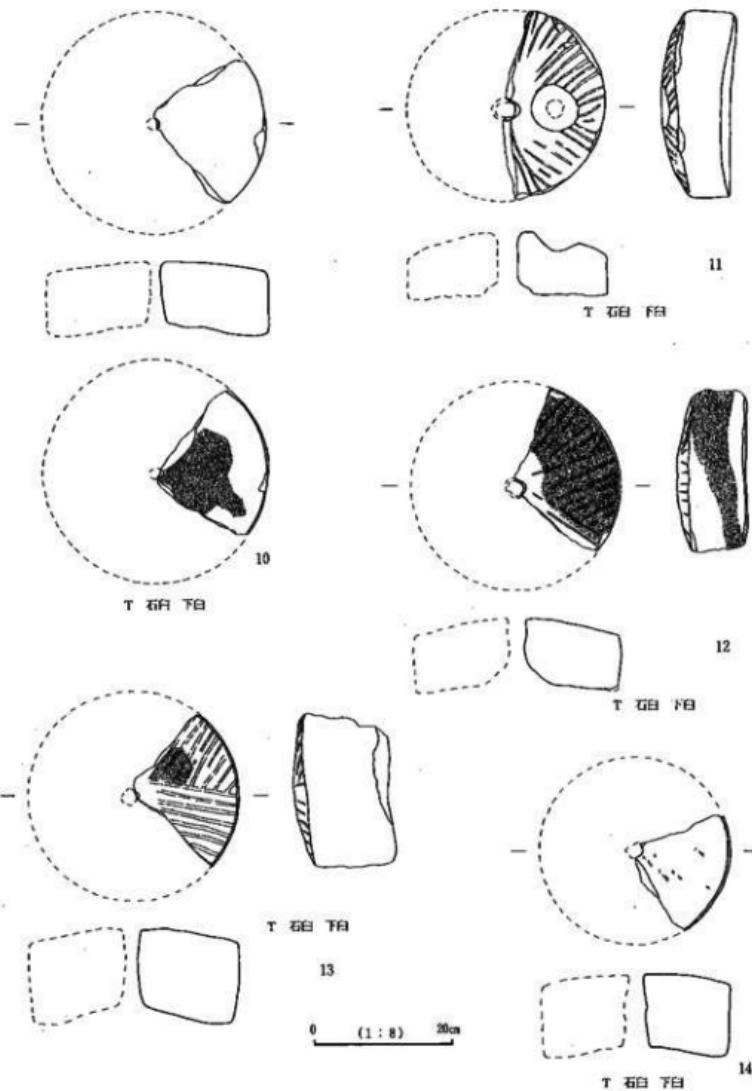
第24図 特殊遺構実測図



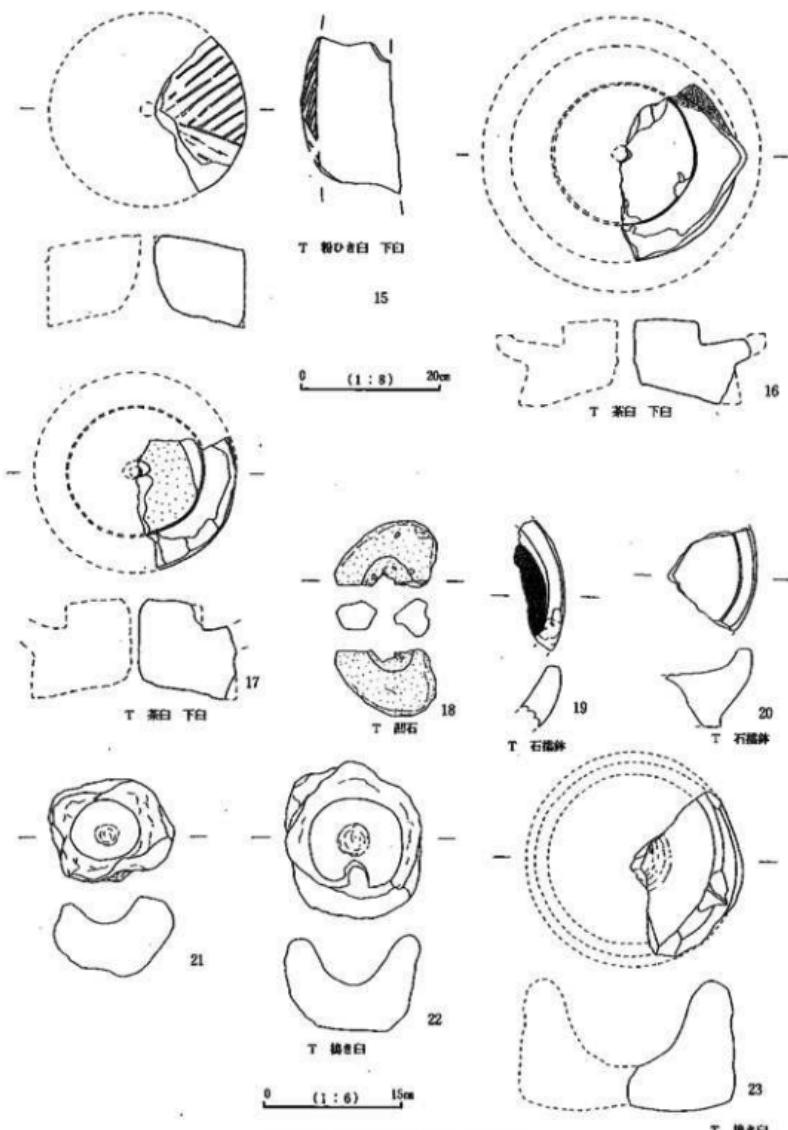
第25図 T特殊遺構出土遺物実測図



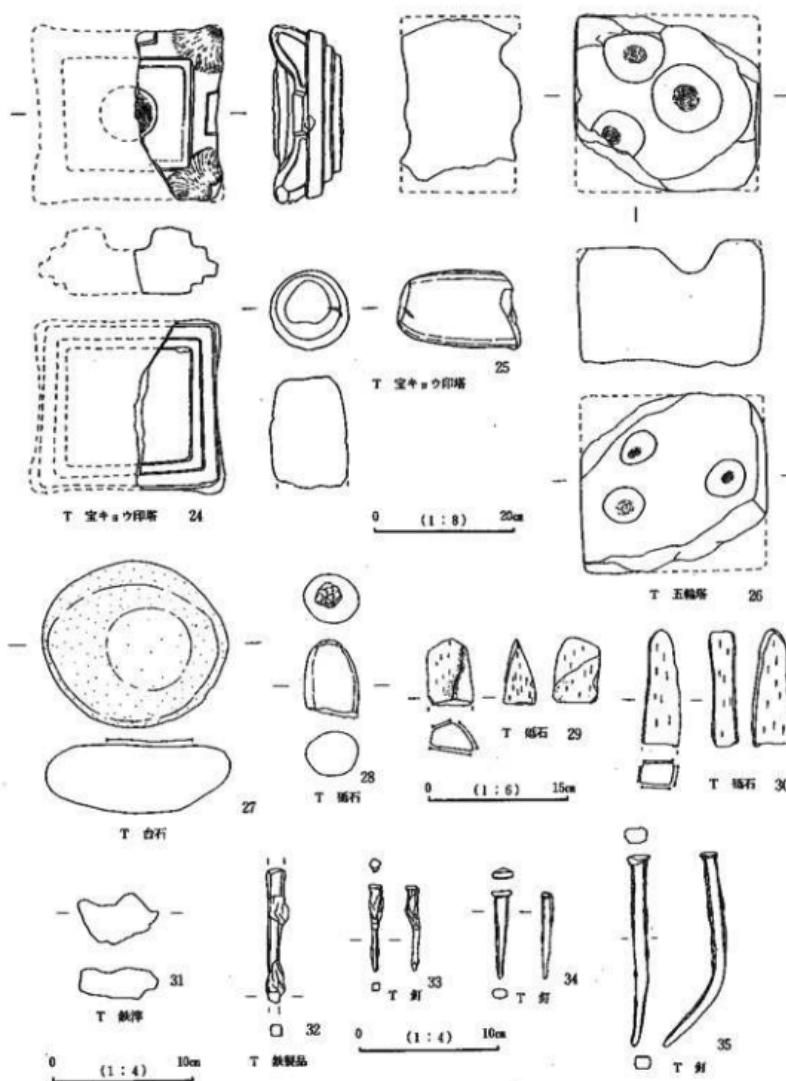
第26圖 T特殊遺構出土石白實測圖



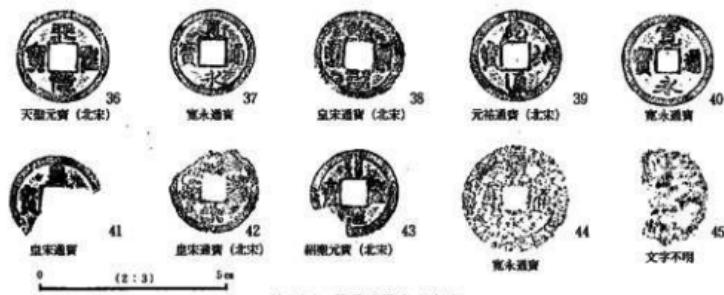
第27図 T特殊遺構出土石白実測図



第28図 T特殊造構出土遺物実測図



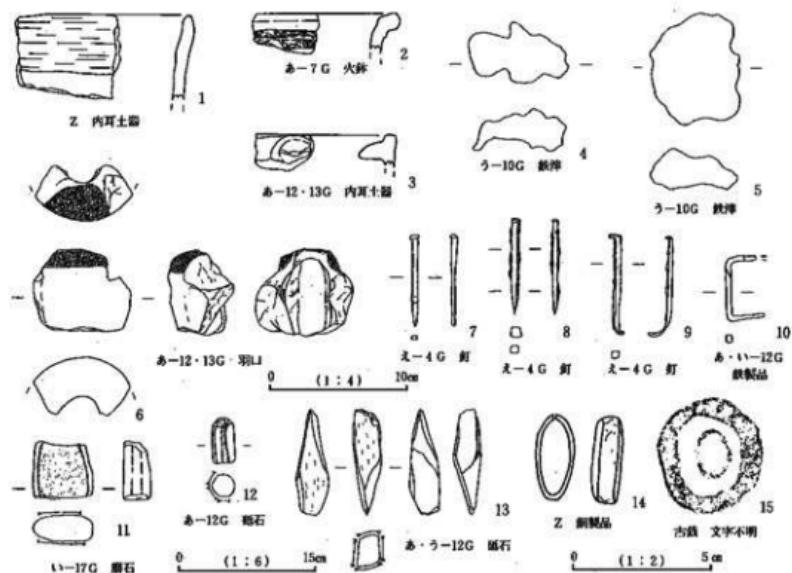
第29図 T特殊遺構出土遺物実測図



第30図 特殊造構出土古錢

第6節 グリッド・表採遺物（第31図）

グリッド、及び、表採遺物については、第31図に示した内耳土器（2点）、火鉢、羽口、砾石（2点）、不明銅製品（幅約1.5cm、長さ約3cmでリング状を呈する）、釘、鐵滓が出土した。このうち時期を判別できるものは19世紀代と思われる火鉢、内耳土器がある。



第31図 グリッド・表採出土遺物実測図

付 編

中宿遺跡の骨類

宮崎重雄

本遺跡は佐久市大字岩村田字中宿にあり、出土した獣骨類は中世～江戸時代のものである。

I. 特殊遺構

1. ウマ

肩甲骨

肩関節窓の横径が37.8mm、肩関節窓の上下径46.2mmを計測する左肩甲骨で、10数片に分離している。解体痕と思われる切り傷のある破片もある。

橈骨（表-1）

ほぼ完存する右橈骨で、全長307.4mmを計測し、林田・山内（1957）の体高推定式を用いて、体高を算出すると、小型在来馬相当の122.0cmという値を得る。

尺骨

上記の右橈骨と一体の尺骨が遠位部で分離したものである。

中手骨（表-1）

右の中手骨で、ほぼ完存しているが、近位端内側面と後側面に齧歯類（ネズミ類）による嚙痕がある。食肉動物の咬み痕らしきものもついている。

この中手骨は全長が197.6mmあり、この値を林田・山内（1957）の推定体高式に代入すると、小型在来馬相当の119.6cmの体高を得る。

以上の各部位は同一個体のものであろう。

2. イノシシ

左上腕骨で、近位骨端部を欠失する。近位保存部には食肉動物（おそらくイヌ）の咬み痕が多数ついている。

骨体中央幅は24.1mm、骨体中央前後径は30.4mm、滑車最小直徑は22.9mmで、現生のイノシシより遙かに大きいが、滑車上孔が開いているので、イノシシ以外の動物とは考えられない。

3. イヌ

イヌの右大脛骨近位端片で、近位端最大横径35.4mm、骨頭垂直徑18.8mm、同前後徑18.3mmで中型犬に相当する大きさである。

II. OT 2

ウマ

ウマの左上顎白歯6本と左上顎後白歯3本と頭蓋片、環椎片、軸椎片である。

老齢馬の歯の咬耗が極端に進み、咬合面のエナメル質が咬耗し尽くされている部分もある。

全白歯列長は149.3mmである。ウマの歯は齒根側へやや窄まっている形態をしているので、咬耗が進むと歯列長は小さくなる。それを考慮しても、このウマの全白歯列長は小型馬相当と思われる。

III. OT 3

1. ヒト

脳頭蓋片5片で、そのうちのもっとも大きな破片は後頭鱗部で、脳頭蓋内側の内後頭隆起・内後頭稜・横洞溝、脳頭蓋外側の外後頭隆起・外後頭稜・下項線が観察される。

ラムダ縫合・後頭乳突縫合は内板は癒合はしているようであり、老年期～老年期の個体と思われる。

〈表-1〉 中宿遺跡ウマ計測値

	右橈骨	右中手骨
全長	307.4	197.6
近位最大幅	62.7+	39.4+
近位最大前後徑	39.7	25.5
骨体中央幅	35.2	26.9
骨体中央前後徑	23.9	20.3
遠位最大幅	64.2	38.9+
遠位最大前後徑	35.5	27.5+

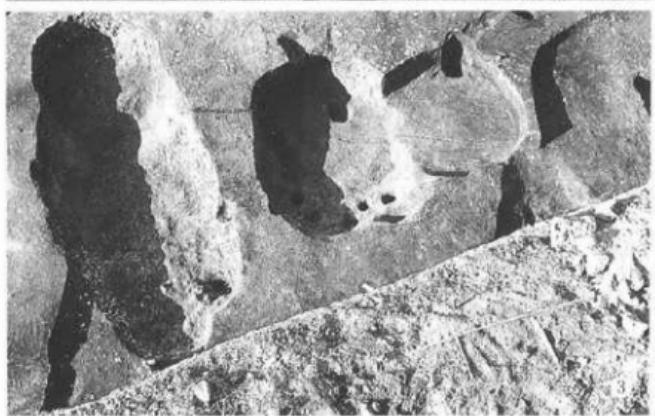
1
H1号住居址
(北方より)



2
H1号住居址
掘り方
(北方より)



3
H2号住居址
掘り方
(南方より)





1

1
H3号住居址
(北方より)



2

2
第2号竪穴建物址
(南方より)



3

3
第1号竪穴建物址
(東方より)



4

4
第3号竪穴建物址
(南方より)

1
第5号竪穴建物址
(西方より)



1

2
第6号竪穴建物址
(西方より)



2

3
第7号竪穴建物址
(北方より)

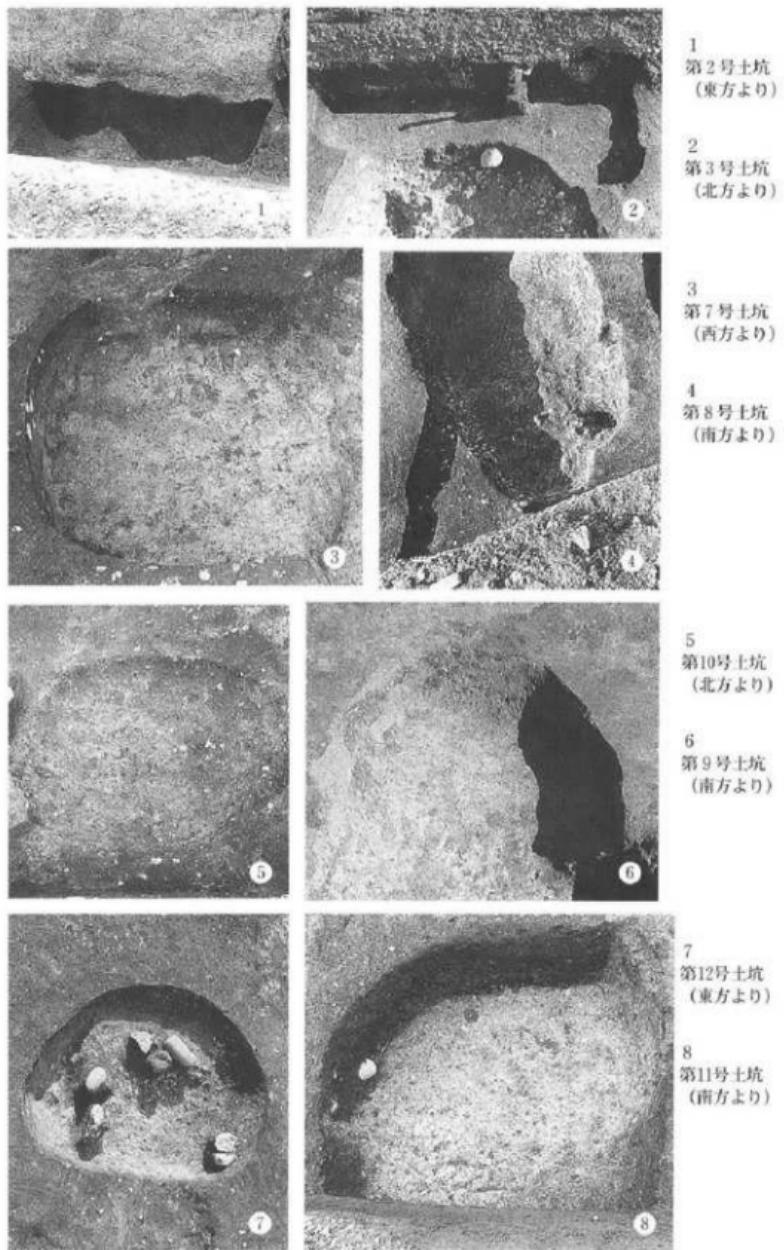


3

4
第1号土坑
(北方より)



4



1
第14号土坑
(東方より)



1

2
第13号土坑
(南方より)



2

3
第1号墓坑
(西方より)



3

4
第2号墓坑
(北方より)



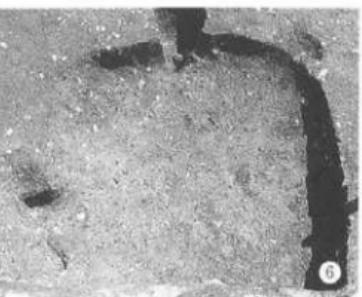
4

5
第2号墓坑
馬骨出土状況
(南方より)



5

6
第3号墓坑
(北方より)



6

7
特殊遺構
(南方より)



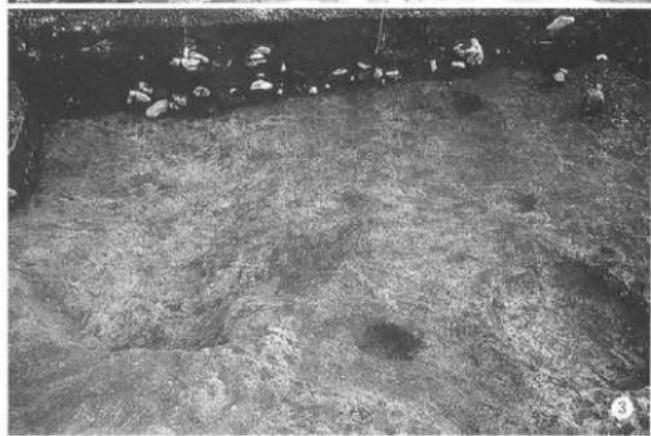
7



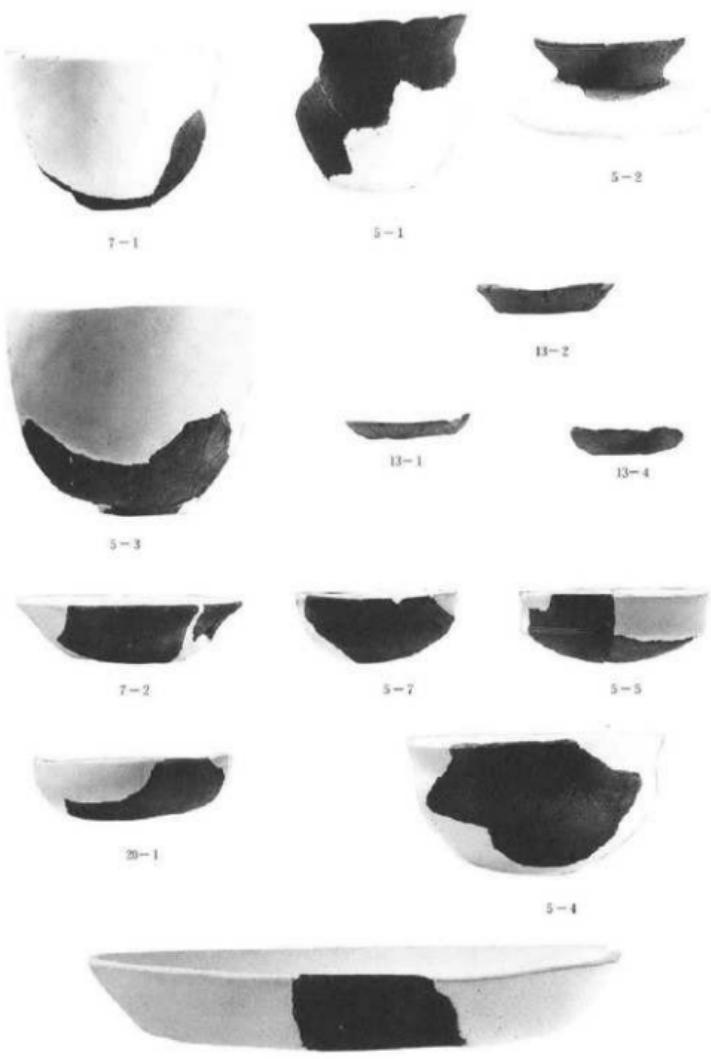
1
特殊遺構
馬骨出土状況
(北方より)



2
特殊遺構
集石出土状況
(東方より)

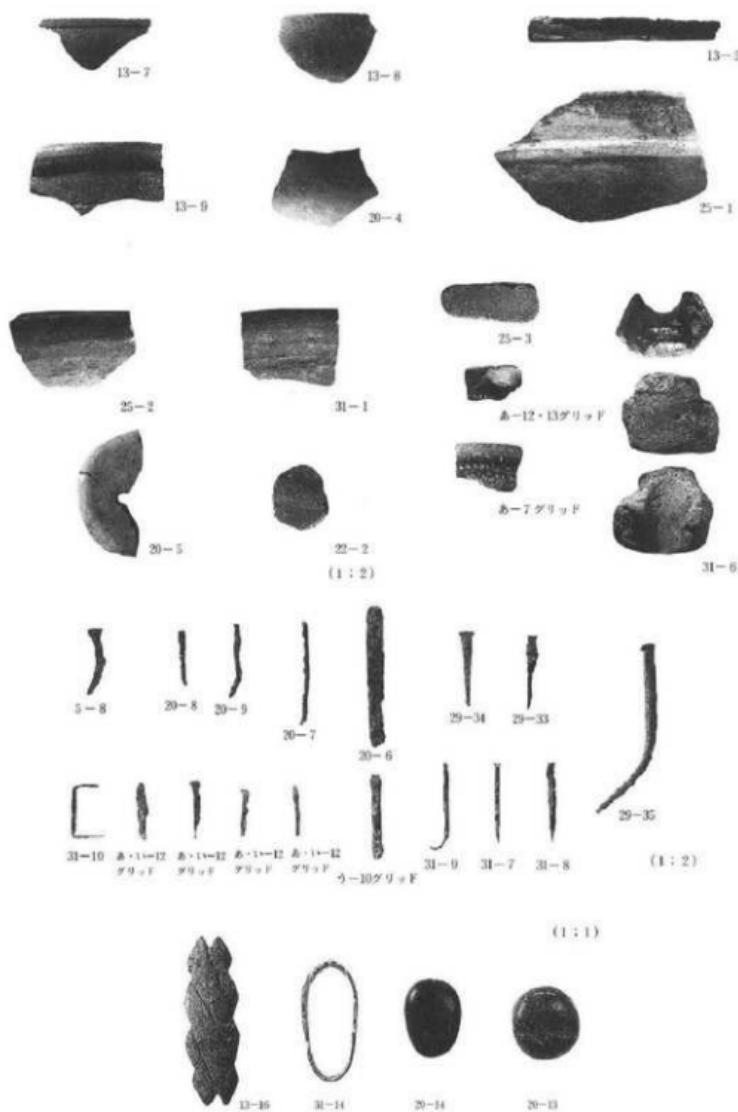


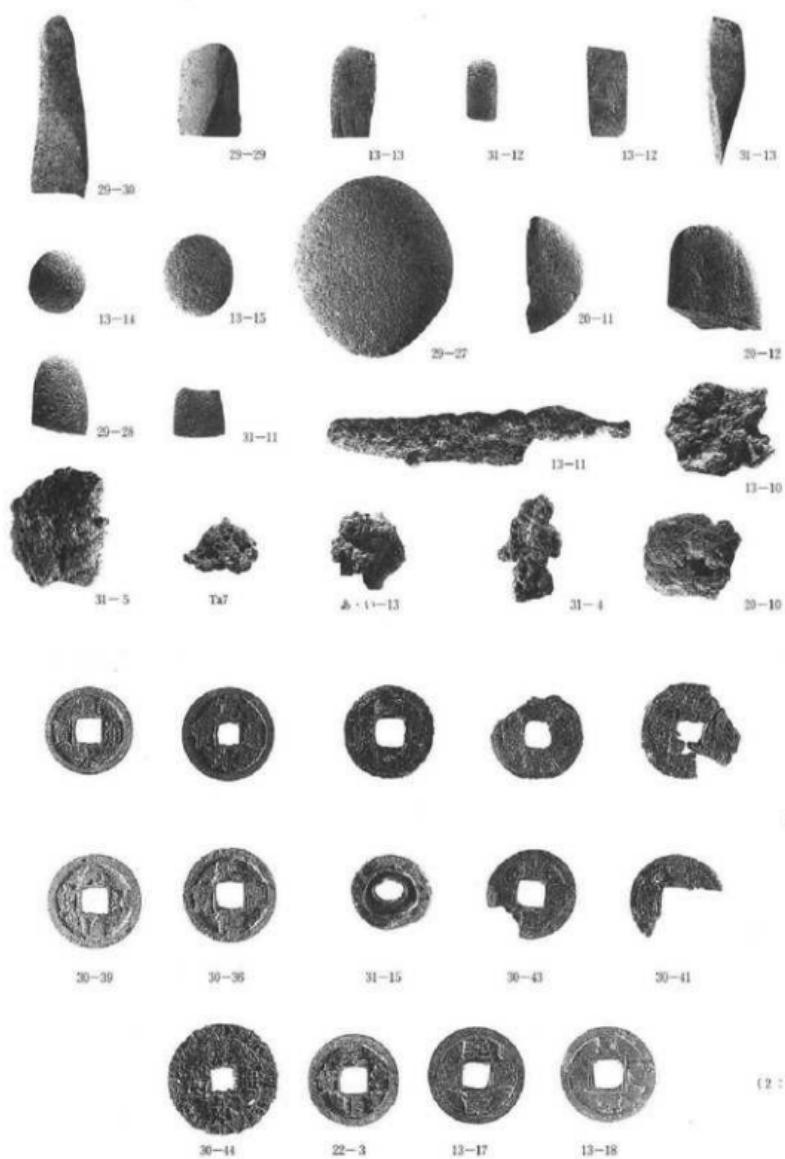
3
特殊遺構
掘り方
(北方より)



(1 : 4)

図版八







26-6



26-7



26-8



26-9



27-10



27-14



27-12



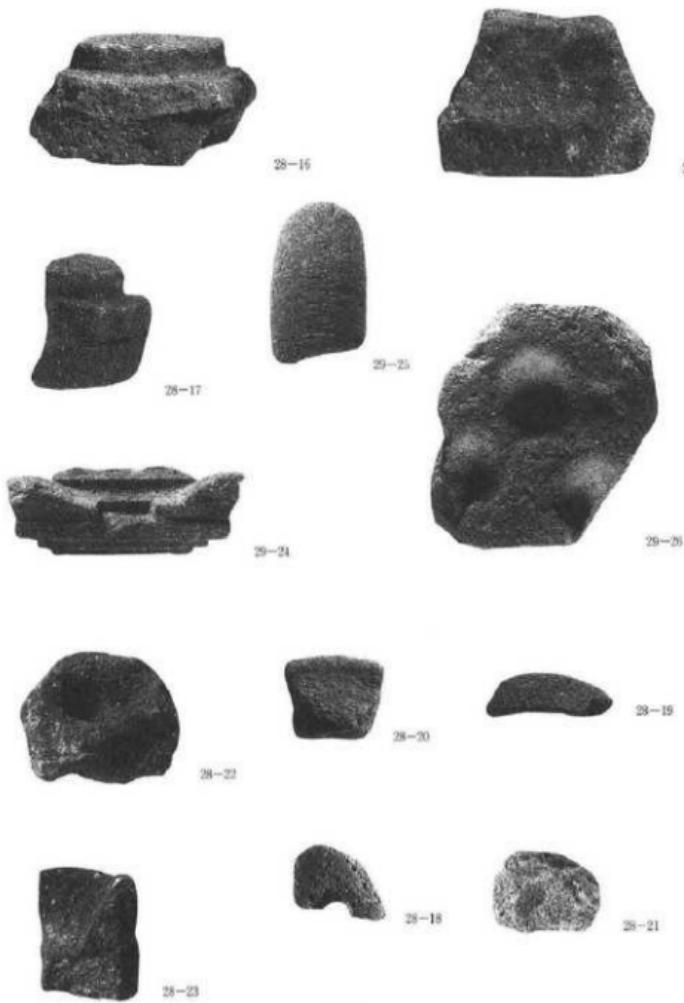
27-1



(1 : 6)



27-13



(1 : 4)



佐久市埋蔵文化財調査報告書

第11集	「赤塙坦外遺跡」	第37集	「西一本柳遺跡Ⅱ・中西ノ久保遺跡」
第12集	「若宮遺跡Ⅱ」	第38集	「南下中原遺跡Ⅱ」
第13集	「上高山遺跡Ⅱ」	第39集	「中屋敷遺跡」
第14集	「栗毛坂遺跡」	第40集	「寺畠遺跡」
第15集	「野馬久保遺跡」	第41集	「曾根新城Ⅰ～Ⅳ・Ⅵ他」
第16集	「石並遺跡」	第42集	「寄山」
第17集	「市内遺跡発掘調査報告書1991」(1～3月)	第43集	「櫛現平遺跡」
第18集	「西曾根遺跡」	第44集	「寺添遺跡」
第19集	「上芝宮遺跡」	第45集	「市内遺跡発掘調査報告書1994」
第20集	「下堅城遺跡Ⅲ」	第46集	「湯り遺跡」
第21集	「金升城跡Ⅲ」	第47集	「上芝宮遺跡V」
第22集	「市内遺跡発掘調査報告書1991」	第48集	「池端城跡」
第23集	「市上中原・南下中原遺跡」	第49集	「根々井芝宮遺跡」
第24集	「上聖塙遺跡」	第50集	「藤塚遺跡Ⅲ」
第25集	「上久保田向Ⅳ」	第51集	「寺中遺跡・中屋敷遺跡Ⅱ」
第26集	「藤塚古墳群・藤塚Ⅱ」	第52集	「坪の内遺跡」
第27集	「上久保田向Ⅲ」	第53集	「円正坊遺跡Ⅱ」
第28集	「曾根新城Ⅴ」	第54集	「市内遺跡発掘調査報告書1995」
第29集	「山法師遺跡B・筒村遺跡B」	第55集	「番屋前遺跡」
第30集	「市内遺跡発掘調査報告書1992」	第56集	「聖原遺跡Ⅹ」
第31集	「山法師遺跡A・筒村遺跡A」	第57集	「高師町遺跡Ⅱ」
第32集	「東ノ瀬」	第58集	「下穴虫遺跡Ⅰ」
第33集	「聖原遺跡Ⅸ・下曾根遺跡I・前藤部遺跡I」	第59集	「市内遺跡発掘調査報告書1996」
第34集	「西一本柳遺跡Ⅰ」	第60集	「曾根城遺跡Ⅱ」
第35集	「市内遺跡発掘調査報告書1993」	第61集	「削地遺跡」
第36集	「蛇塚B遺跡Ⅲ」	第62集	「野馬久保遺跡Ⅱ」
		第63集	「西大久保遺跡Ⅱ」
		第64集	「梨の木遺跡Ⅱ」
		第65集	「中宿遺跡」

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第65集

岩村田遺跡群 中宿遺跡

1998年3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市大字中込3056

埋蔵文化財課

〒385-0006 長野県佐久市大字志賀5863

TEL 0267-68-7321

印刷所 (株)佐久印刷所

